紀伊半島の旅 2019

2019 年 12 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

秋も深まった紀伊半島に妻と自動車旅行に行ってきた。といっても紀伊半島を一周したのではなく南紀白浜、京都、そして志摩とピンポイントで訪問した。観光が半分、あとは友人たちとの忘年会やゴルフ、孫の七五三なども加わった一週間の旅を紹介する。

■南紀までの道

私の運転する車は南紀白浜を目指して夜明け前の新東名高速道路を快調に飛ばしている。そんな早朝に車を走らせている理由は、私たち夫婦は早朝 3 時 30 分過ぎに家を出て東名高速道路に午前 4 時前に乗ったからだ。

ご存知の方も多いかも知れないが午前 0 時～午前 4 時の間に高速道路に乗っていれば、通常料金の 30%オフの深夜割引が適用される。この割引はたとえ 3 時 59 分に乗っても、昼間になって高速道路を降りるまで適用されるので、まさしく早起きは三文の得というものだ。

それは夜遅い場合も同様で午前 0 時を過ぎて高速道路を降りれば深夜割引が適用される。

大阪南部の高速道路 PA で珍しいものを見つける。「赤赤鶏のソースカツ丼」なるポスターが貼ってあり、赤赤鶏とは赤鶏を元に生まれた鶏で 2%しか流通していないと書いてある。

ソースカツ丼評論家を自認する私は、腹の減り具合も関係なく早速注文する。

出てきた丼ぶりは白いご飯の上にキャベツではなく玉ねぎが敷いてあり、揚げた鶏のムネ肉をソースに浸けて乗せ、胡麻がかけてある。

鶏のムネ肉だから食感は群馬県桐生市の豚のヒレ肉を使ったソースカツ丼に似ている。豚のロース肉を使用したものに比較して、鶏肉のさっぱり感からむしろこちらの方を好む人も多いだろう。ソースはやや甘めで、ウスターソースを使った桐生のソースカツ丼とはだいぶ異なる。

玉ねぎとの相性に多少の疑問も残るが、全体的に満足するレベルに仕上がっている。

調べてみると同様なソースカツ丼は奈良県内の高速道路の SA にもある。恐らくはこの地域に元々ある名物というよりも高速道路施設へ出店している業者が名物になるように開発したものなのだろう。

■湯快リゾートの宿

朝早く出たので南紀白浜にはまだ日が高いうちに到着した。ここで地球一周の船旅で知り合った関西在住の友人たちと合流し忘年会をすることになっている。

今夜の宿はその友人の一人が取ってくれた「湯快リゾート白浜彩朝楽プレミアム」で、私にとっては初めて泊まる宿である。昔は高いホテルだったようでエントランスも広々しており高級感があり、フロントの対応もそつがない。

「湯快リゾート」は西日本でビジネスを展開する温泉ホテルグループなので、関東には一店舗もない。

経営難に陥ったホテルや旅館を安く買い取って独自のノウハウで再生して利用客に安く提供するというビジネスを展開しており、同様のホテルグループは東日本では「おおるり」や「伊東園」があり、後発ながら全国展開している「大江戸温泉物語」も有名だ。

当然宿泊費はどこも安い。昔は宿泊費一律のところが多かったが、最近は買い取った価格に応じてホテル毎に多少の差がある。それでもあえて安い順に並べるとすれば、おおるり、伊東園、湯快リゾート、大江戸温泉物語の順だろう。これはターゲットにしている客層の違いでもある。

それらの宿では宿泊費を抑えるためにいくつか工夫している。

食事はビュッフェスタイル、いわゆる食べ放題になっている。この形式を採用することによって盛り付けや配膳の手間が大幅に省ける。それはそうだろう盛り付けも配膳もお客自身がやるのだから当たり前だ。

ちなみに食べ放題は日本ではバイキングという愛称で定着しているが、それは日本で初めて食べ放題を採用したレストランの店名がバイキングだったことに起因している。だからこの言葉は外国では全く通用しない。おっと話がそれた。

布団はお客が夕食を食べている時に敷きに来るのではなく、チェックイン時に部屋に入ると既に布団が敷いてある。部屋の清掃時に敷くので相当に合理化される。

合理化だけでなく集客も考えられており、大都市圏のお客を呼び入れるための直行送迎バスを安価に独自運行させている。このバスがお客にとっては案外ありがたい。

湯快リゾートの宿が南紀白浜に 3 軒もある。直行送迎バスを 3 つの施設で共同運行できるというメリットがあるのだろうが、大丈夫だろうか。かつては新婚旅行のメッカと呼ばれた南紀白浜だが、今もそんなに多くのお客が来るのだろうかと心配してしまう。

しかし湯快リゾートは採算が取れると判断したのだろう。腐っても鯛というと失礼だが、新興温泉地では味わえない魅力があるのだろうと、私はそれを知りたいという興味が湧いてきた。

■日本三古泉の湯

チェックインして部屋に入りまずは温泉に行こうと思っていたら、プシュッと缶ビールを開ける音がする。再会を祝してまずは乾杯ということか。長距離運転を強いられてきた私も断わる理由もなく、プチ宴会が始まる。地球一周の船旅の時にもいつも飲んでばかりいた仲間だが相変わらずの事態に懐かしささえ感じる。

プチ宴会も程々にして、やはり南紀白浜といえば温泉だろう。何しろ有馬温泉、道後温泉に並んで日本三古泉の由緒ある温泉だ。

この宿の風呂は温度の異なる大きな内湯が 2 つ、そして露天風呂があるというオーソドックスながら申し分のない造りになっている。特徴的なことは床がタイルやコンクリートではなく畳敷きになっていることだろう。ヒンヤリ感がなく滑らない。滑らないから受験生やお笑い芸人にはいいだろう、おっと余計な突っ込みだったか。

泉質は無臭、無色透明ながら、湧出温度 61℃の湯が自然湧出している。最近は地中深くから汲みあげる温泉が多いが、自然湧出の湯は地球のエネルギーみたいなものを感じる。

■夕食でマグロの解体ショー

夕食はもちろん“バイキング”で、各種料理や新鮮な魚貝類がテーブルにたくさん並んでいる。

出来立ての料理を提供するコーナーがあり、専任の料理人がその場で天ぷらを揚げ、ステーキを焼いて出してくれる。最近よく見うけられる高級スタイルだ。

しばらくするとマグロの解体ショーが始まる。会場には包丁を握る料理人の威勢のいい声が響いている。解体ショーの周りにはカメラを手にお客が集まって人だかりができている。

その中で私が着目したのは、配膳やお客の誘導をするスタッフたちの参加だ。料理人の掛け声に合わせて「もう一丁！」とか「お見事！」など作業を止めて大きな声を掛けている。その声によって広い食事会場全体が盛り上がり、宿としての一体感も伝わってくる。

私には「ここは太平洋に面した南紀白浜だ！有馬や道後、山の中の草津とは違うぞ！」ということを訴えているかのように感じた。

帰り際に見つけたのは子供用の食事や離乳食のコーナーである。同様なものを最近泊まった大江戸温泉物語の宿でも見かけたがターゲットの客層が比較的若い子育て世代にまで広げていることが分かる。

■白浜を散策

忘年会は食事の後も部屋で延々と続いたが、一夜明けて翌朝のメンバーの顔は清々しい。さすが 3 カ月半に及ぶ船旅で培った胃袋も肝臓も健在のようだ。

天気も清々しいので少しの時間を使って白浜を散策する。とはいっても歩いて回れるほど街は小さくないので車を併用しての散策になる。

私は何度かこの地を訪れたことがあるが、昔に比べて街も観光施設も整備されたように感じられる。

白浜の語源にもなった真っ白い砂の白良浜（しららはま）は相変わらず白さが際立っている。石英の砂なのでかつてはガラスの原料としてこの砂が大阪に運ばれていたが、ガラス製法の変化や景観保護のために採掘されなくなった。

さらにゴミ一つ落ちていないのは、恐らく毎日地元の人たちが清掃しているのだろう。

白良浜は防波堤に守られているが、この防波堤が洒落ている。紀伊半島最南端の潮岬には橋杭岩という岩が杭のように立っている名所があるが、それをモチーフにしたように岩が立っている。

千畳敷という景勝地がある。確か青森の五能線沿線にも同じ名前の景勝地があったが、広さは青森の方が数倍も広い。しかし観光客の数や賑わいではこちらの方が数倍勝っている。

その理由は何だろうか。比べる青森には申し訳ないが、太平洋の持つイメージもあってこちらの景色の方が勇気や希望を感じる。人生の門出となる新婚旅行ではその雰囲気はとても重要だ。

太平洋の青い海を背景に広がる大きな白い岩盤、長い年月をかけて荒波に浸食された岩に波と風が当り「南紀白浜ここにあり！」と主張をしているように聞こえる。

■旅の目的

白浜での忘年会イベントも終わり、妻は京都の娘夫婦の家に行くのに当初は電車で行こうとしていたが、電車では 6000 円以上かかる。そんな時に大阪・京都に行く宿の直行送迎バスのことを思い出した。それは片道運賃が 2000 円というもので、妻はそのバスで一足先に京都に行く。私は残ってゴルフに興じ、さらに親交を深めることにする。

昼はゴルフ、そして夜はいつものように飲み、取り留めのない話で盛り上がる。地球一周の仲間らしく話は旅に及ぶ。
その中の一人が、旅に行くか行かないかで悩んでいるという。
好意にしている人たちから海外旅行に誘われている。誘っている人たちはその国は初めてでぜひみんなで行きたいと言っているが、誘われている彼はその国には既に何回か行っており、あまり興味がわかない。しかし彼は何よりも人との繋がりを大切にするので、非常に悩ましい。
確かに旅は未知の場所に行って新しい発見をして感動を得るのが一般的だが、同じところに行ってもメンバーが異なれば違う発見もあるかもしれない。

これは頻繁に旅する者にはよくある悩みだが、私の場合は死ぬまでに夫婦で 100 ヵ国訪問という目標があるので海外旅行は基本的にリピートしないからそのような悩みは発生しない。しかし国内旅行ではしばしば経験する悩みだ。

この悩みに、答えはあるのだろうか。
実は私にはおぼろげながらだが既にその答えがある。それは旅に何を求めるか、旅に出る前にその旅の目的を決めることだ。
どんな旅にも観光、親睦、撮影などの目的がある。通常はそれを意識することなく旅に出たいと思った時に無意識に決めている場合が多い。そして目的は一つである必要もなく複数でも優先順位さえ付いていればいい。
目的がはっきりすると旅のプランも立て易い。何処に行くとか、何に時間とお金をかけるかとか、誰を誘うかなど、結果として計画も実行もスムースに進む。

彼の悩みの解決策は誘われている旅の目的を決めることだが、それが結構難しいのが現実だ。しかしながら、人生において決断というものは避けては通れない。
日常生活では決断する機会は少ないが、非日常の旅においてはその機会は多い。情報を集めて決断することが旅には求められる。特に海外個人旅行はその連続になる。
彼が行くか行かないか悩んでいるのが、その海外個人旅行だから実に皮肉な巡り合わせだ。

旅は情報収集、決断、実行の連続だから、「旅は最大のボケ防止」と誰かが力説していたことを思い出した。

■松尾大社は何の神様
仲間たちと別れ、私は紅葉真っ盛りの京都にやって来る。京都に住む孫の七五三で嵐山に近い松尾大社にお参りするのだが、この神社がなかなか面白い。

松尾大社は観光ルートからやや外れているので観光客も少なく比較的ゆっくりとできるため地元の人たちが七五三、お宮参りなどに使っている。同行している娘婿の話では、ここの神様は交通安全と酒が専門だという。交通安全祈願は分かるが酒の祈願とは何だろう。
娘婿に訊ねると、「酒造り、酒の販売、そして酒飲みですよ」と返ってくる。

それを裏付けるようなお守りを売っている。醸酒守、販酒守、そして服酒守がある。どれも私にとっては初めて見るものだ。さすがに京都、神々も大勢いるので仕事が多い。

お守りを売っている若い女性に「禁酒祈願はないの？」と質問すると、アルバイトらしき彼女はキョトンとしている。

娘婿が「禁酒は、酒販売と酒飲みと相反していますからね」と助け船を出す。

すると彼女は「健康祈願のお守りですね・・・」と、何となく分かったような気になる。

■驚きの宿「TAOYA 志摩」

七五三も無事に終え、娘夫婦たちと分かれ私たちの車は志摩半島に向かっている。

今年の 9 月、大江戸温泉物語ホテルニュー塩原に泊まった時に営業の女性スタッフと話をする機会があり、彼女にこのグループのイチ押しの宿を聞いたところ「TAOYA 志摩」を強く勧めてくれた。彼女は「今まではあんな高級ホテルは高くて泊まれませんでしたが、大江戸温泉物語になったので泊まれるようになりました」と言うのでなるべく早い時期に行こうと心に決めていた。

今回の南紀白浜に合わせて TAOYA 志摩を予約しようとしたが、平日なのに満室で予約できなかった。日程を変えて何とか予約できたという人気ぶりだ。

地図では鳥羽白浜海水浴場のすぐ近くなので、鳥羽の市街地から 20 分くらい車を走らせる。

ホテルに入ると広いロビーがあり、大きなガラス越しに海が広がっている。海岸はきれいな砂浜でホテルのプライベートビーチだと思っていたが、地図を思い出すと鳥羽白浜海水浴場だと気がつく。私はこのロケーションに感激し、七五三をした孫を海水浴に連れて来たくなる。

ホテルと砂浜の間は芝生になっており、草間彌生の「南瓜」という大きな作品がひと際異彩を放って置かれている。草間彌生は 1929 年生まれの 90 才、水玉模様などの絵画や彫刻が特徴で、ここにある作品のようにカボチャをモチーフにしたものも多い。

全ての部屋はオーシャンビューで、私たちが泊まる部屋は定員 3 人でシングルベッドが 2 台置かれて、エキストラ用のソファーベッド 1 台が海を見て寝転ぶことができるように窓際にソファーとして置かれている。このソファーの配置がのんびり感、ゆったり感を演出してくれる。

■インフィニティ温泉

早速風呂に行く。もちろん温泉だ。

宿の宣伝文句ではインフィニティ温泉と称しており、内湯、露天風呂、人口池、そしてその先に広がる海がインフィニティ（無限大）に繋がっている様を言っているのだろう。湯船の淵からお湯が外に溢れ出ているように見える。このような湯船の構造は最近良く見かけるもので、星野リゾート青森屋の露天風呂もそうだった。

それゆえに湯に浸かると海と一体化したような気分になる。

私がその海を眺めて気持ちよく湯に浸かっていると、私よりもだいぶ年上のおじいさんが声を掛けてきた。

「この湯の温度は何度か？」と聞いてくる。

私が答えようとすると、「41℃くらいだね」と彼が勝手に答える。

さらに彼は「人間が長い時間入れる風呂の温度は知っているか？」と言ってくる。

私は「40℃くらいですか」と言うと、「36.5℃プラスマイナス 5℃だ」という。

そしてまた「それは人間の体温が 36.5℃くらいだから・・・」と、彼のうん蓄が始まる。

これはまさしくインフィニティ、無限になりかねない。私は早々に「のぼせてきたので、失礼しますね」と退散する。

うん蓄もいいが、湯船に浸かりながら初対面の人にこれはやり過ぎだろう。やや憤慨するが、似たようなことを時々自分がやっていないかとハッとする。

風呂から出て休み処にくると、今度は人の良さそうなおじさんが近づいてくる。

左手にビールが入っている透明なコップを持って、右手の人差し指は私の斜め後方を指している。顔には満面の笑みを浮かべながら、彼の視線は左手のビールと私の斜め後ろと交互に移し替えている。

私は当然のように斜め後ろが気になって、振り向く。そこには生ビール、ジュース、アイスキャンデーがあって、無料サービスだと書かれている。

おじさんはそれを伝えたかったのだが、恐らく無料サービスに感激したので声を出すことも出来ずにジャスチャーになってしまったのだろう。

おじさんの親切心を無駄にできないと駆けつけ 3 杯ビールをいただく。小さいコップながら 3 杯はそれなりの量だ。そして私もおじさん同様に感激したので、このサービスは何時までやっているのかとスタッフに訊ねると、夜の 12 時までだという。その間にいくらでも飲んでも構わないというから正直言って私はこれには驚いた。

心地よくビールを飲んでいると、妻がぼやきながら女湯ののれんをくぐり抜けて出てきた。
どうしてぼやいているかと聞くと、人がいっぱいで芋を洗うようだったという。特に洗い場が少ないので洗い場待ちの人が溢れて、仕方なく洗わずに出てくる人もいたという。確かにホテルの収容人数に対して風呂は小さいかもしれない。
その昔は温泉旅館の大浴場が男性用、中浴場が女性用というのが相場だったが、男女平等ということもあり今は男女同じ大きさというのが一般的だ。しかし昨今は温泉旅館やホテルでは女性客の方が明らかに多い。その理由は中高年では女性の方が元気なので旅行に出るのも女性が多いのと、全ての世代において女性の方が温泉好きだ。
そういうことから考えれば、女湯が芋洗いになることは充分に想像できる。
これだけのサービスを提供するホテルならば何か手を打たないといけないだろうと、その旨を早速アンケートに記入し投函する。

■食事と夜食
この宿にはもちろん食事も期待してしまう。
レストランの雰囲気は上々で、センスがいい。海を連想させようとしているのだろうか、天井や壁は曲線を上手く使った空間になっており、白い漆喰を大雑把に塗った壁や柱が波のように見えるのがとても印象的だ。

食事はもちろん“バイキング”で、4 日前に泊まった湯快リゾートの宿よりも明らかにワンランク上だ。専任の料理人による天ぷらやステーキはもちろんのこと、志摩特産の牡蠣、松茸ご飯も嬉しい。デザートのアイスクリームは有名なハーゲンダッツだ。

食事を終えて再び温泉に入り、例のビールを飲み、星空テラスと呼ばれるところに星を見に行くが残念ながら曇っていて星は見えない。足湯があるので、夏ならば足湯に浸かりながら星を見ることができる。もちろんこの寒さでは誰もいない。

夜も遅くなり夜食のサービスがあるというのでラウンジに行く。このラウンジは昨日来館した時にウエルカムドリンクの提供があったところだ。
夜食にはハーフサイズの塩ラーメンが提供されている。

私はラーメンを作っている中年の女性スタッフに声を掛け「いつもラーメンですか？」と聞くと、彼女は「夏はそうめん、この前までは、うどんでしたよ」と笑顔で答えてくれる。
ついでに「この宿はいつオープンしたの？」と聞くと、彼女は「今年の 4 月からです」と言う。
さらに私が「ここは大江戸温泉物語になる前は何だったの？」と聞くと、「有名人のためのプライベートホテルだったようですよ」と返ってくる。

そんなやり取りをしているうちにラーメンが出来上がる。若干胃袋に余裕ができてきたこともあって食も進み、夜の海を見ながら食べるラーメンはうまい。
それはこの夜食のラーメンが無料だということを、私の胃袋や舌が勝手に理解してのことかもしれない。

■志摩から伊良湖へ
本日は旅の最終日、鳥羽港まで昨日走ってきた道を戻る。
昨日も驚いていたのだが、この一帯は牡蠣の養殖が非常に盛んで〇〇水産や△△牡蠣小屋などがたくさんある。牡蠣小屋からは炭火で牡蠣を焼くいい匂いが漂ってくる。次に来るときは牡蠣小屋に立ち寄って食べたいなどと、妻との車中の会話ははずんでいる。
しかし昔はこんなに牡蠣の養殖が盛んでなかったような気がする。何しろ前回の訪問からだいぶ年月が経っているから無理もない。
それよりも実は昔、私は牡蠣が苦手で食べられなかったことに気が付く。そう、これは自分自身が変わったのかもしれない。
同じ場所でも時間の経過や見る人の変化によって、違う景色になるのか。数日前の旅の目的談議を思い出す。

帰途は鳥羽港からフェリーに乗って愛知県の渥美半島に行くことにしていた。
地図で見ると伊勢湾は名古屋を守るように東西から半島が突き出ている。西は私たちが泊まっていた TAOYA 志摩がある志摩半島、対岸の東側が渥美半島である。志摩半島の鳥羽から渥美半島の先端の伊良湖までフェリーが出ており、55 分で渡ることができる。
大幅なショートカットができるのと、一度も走ったことのないルートなので今回の旅では是非このルートを行こうと決めていた。日本国内の海岸線はほとんど行き尽くしていると自負している私にも、未知の海岸線がまだまだあることを改めて感じる。

■旅の終わりに
初めて走る渥美半島は、私にとって実に新鮮だ。この道は国道 42 号で、起点の浜松市から渥美半島を通ってフェリー航路を含め紀伊半島の太平洋岸をひと回りして和歌山市に至る。

国道なのに対向車とはあまりすれ違わないが、リゾートホテルやコンビニは点在している。
細長い半島という地形なので右に海、左には畑、畑の向こうには山が連なる。そんな風景が随分長く続いている。道の駅に立ち寄ると新鮮な海産物と農産物が一緒に並んで売られており、この地域が漁村と農村の両方の顔を持ち合わせていることが分かる。
そういう意味では島に似ている。半島だから、半分島か。
このように細長い半島は日本では少ないが、同様に細長い半島でフェリー航路に続いているのは四国から九州の佐賀関に向かって突き出た佐多岬半島を思い出すが、あの半島も独特の雰囲気があって面白い。ただここ渥美半島は大都市圏に近いので、都会化と過疎化が共存している。さらに関東と関西の間の中京圏にあり、漁村と農村の共存などと相まって独特の文化が感じられる。

やはり旅は、行ったことのない未知の場所に行くということが基本かもしれない。数日前の旅の目的談議を再度思い出す。

そんなこともあって今回の旅の目的を改めて考えてみたくなり、ハンドルを握りながら妻と話し始める。
今回の旅は大きく 3 つの部分に分かれており、目的も 3 つになる。最初の 3 日間は友人たちとの親交を温め、次の 2 日間は孫の七五三、最後の 2 日間は新しい発見を求めたものだった。
こんな複合の旅も案外面白い。

■温泉評価委員会
私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を評価して 5 段階で数値化する。
一般論では 5 段階評価の 75%つまり 3.75 が一つの目安で、私の経験からすると総合評価点として 4 を超えるとかなり良い。

湯快リゾート白浜彩朝楽プレミアムの評価結果は、泉質 3. 風呂 4、料理 4、コスパ 4、秘湯度 2、サービス 4、建物・部屋 4 で総合点は 3.57 になった。秘湯ではないので秘湯度を除くと 3.83 になる。
泉質はナトリウム・炭酸水素塩・塩化物泉の低張性中性泉、源泉は PH7.5、湧出温度は 61℃と高い。

TAOYA 志摩の評価結果は、泉質 3、風呂 3、料理 4.5、コスパ 4.5、秘湯度 3、サービス 4.5、建物・部屋 4.5 で総合点は 3.86 になった。こちらも秘湯度を除くと 4.0 になる。コスパが高い理由は、あくまでも費用対効果なので絶対的な安さだけで評価していない。風呂の 3 は芋洗いの女湯の評価が影響した。
泉質は単純泉、PH9.1、湧出温度 26℃という低張性アルカリ泉である。

■旅の記録

実施は 2019 年 11 月 20 日（水）～26 日（火）の 7 日間で、旅の行程を以下に示す。

・1 日目　朝 3 時 30 分自宅を出発し新東名、伊勢湾岸、新名神、阪和道経由、日の岬 14 時着、国道 42 号経由で南紀白浜「湯快リゾート白浜彩朝楽」16 時着、同ホテル泊

・2 日目　朝遅くホテルを出発し白良浜、千畳敷を散策、13 時 30 分には妻が京都へ出発、その後レオグラードゴルフクラブ 17 時着、ゴルフ場内ロッジ泊

・3 日目　ゴルフプレー後に、大阪に移動しゴルフに同行した友人宅に宿泊

・4 日目　友人宅を出て、京都の娘夫婦の家へ移動し宿泊

・5 日目　松尾大社で七五三とお宮参り参拝、その後大阪に移動し元勤めていた会社保養所に 15 時着、特別料理の蟹づくし優待を食して宿泊

・6 日目　朝、保養所を出発し新名神、伊勢自動車道経由し TAOYA 志摩 15 時着、同ホテル泊

・7 日目　朝 10 時ホテルを出発し、10 時 50 分伊勢湾フェリー乗船し 11 時 45 分伊良湖着、国道 42 号経由で森掛川 IC から新東名経由し自宅に 19 時着

以上の全行程の総費用は 2 人で約 15 万円になる。以下 2 人分の詳細費用を記す。

宿泊費用　95826 円

・湯快リゾート白浜彩朝楽プレミアム　21300 円

・レオグラードゴルフクラブ（1 人分の 3 食付ゴルフ宿泊パック）16460 円

・会社保養所（蟹づくし優待、飲み物含む）　29210 円

・TAOYA 志摩　28856 円

交通費　約 38600 円

・走行距離約 1450km でガソリン代約 10700 円

・高速道路料金 17400 円（往路 7800 円、途中移動 4800 円、復路 4800 円）

・バス代 2000 円（妻のみ）

・フェリー（鳥羽→伊良湖）　車 1 台と運転手 6900 円、同乗者が 1600 円

その他　約 13000 円

昼食、飲み物、その他土産など

この費用からゴルフや大阪、京都でかかった費用を差し引くと 2 人で約 9 万円になる。それはつまり南紀白浜に泊まり紀伊半島南端を回り志摩に泊まる 2 泊 3 日の旅行のシミュレーションになる。そしてこれには昼食代や飲み代、土産まで含まれている。

費用をもっと抑えて車 1 台に 4 人乗る旅にして、湯快リゾート、TAOYA 志摩に泊まり紀伊半島を国道 42 号で一周する 2 泊 3 日の旅で 1 人当たり 3 万円台になるだろう。